The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『グルブム』にみられる断境説について

西　岡　祖　秀

1．序

シチェ派の開祖タムパ・サンゲ（Dam pa Sang rgyas, ?–1117）に起源を発し，マチク・ラプキドゥンマ（Ma cig Lab kyi sgron ma, 1055–1143等）によって大成された断境説[1]は，各宗派においても伝承され，広くチベット仏教を代表する修法の一つとなった．本稿では，その事例の一つとして，カギュ派の二祖ともされるミラレーパ（Mi la ras pa, 1040–1123/1052–1135）の説教歌集である『グルブム』に述べられる断境説を取りあげ，その意義について考察したい．

2．ミラレーパの略伝と断境説関係の事績

『テプテルグンポ』によって，ミラレーパの略伝を要約すれば以下の通りである．彼は1040年（庚辰）に生まれ，38歳でマルパに弟子入りし，44歳まで師事してその秘法を伝授された．師のもとを辞すと故郷のクンタンに帰って6ヵ月を過ごした後，キーロン山中での9年間の禅定により修行を完成させた．ついでカイラース山，ラ(プ)チ，チュワルなどを訪れて多数の弟子たちを育成したのち，1123年（癸卯）に84歳で亡くなったとされる[2]．このうち，断境説関係の事績はチュワル[3]訪問以降に見られ，その本文には「それから（尊者ミラレーパは）チュワルに行かれ，出現した神霊や悪魔の軍を打ち負かした．そのあと様々な村落や寂静な土地に行って留まり弟子も育成された．（チベットに来た）インドのダルマ・ボーディに会いに行かれたが，彼(の方)が尊者に恭敬礼拝した．タムパ・サンゲもティンリに滞在しておられた際，尊者と会い論談された．チュワルで悪魔が出現したのは，ガムゾン・トゥンパによれば壬辰の年（1112年）であると言われているから，尊者の御年は73歳となる．」とある[4]．これらの事績については，ミラレーパの『グルブム』では，チュワルにおける悪魔の調伏が第28章に，ダルマ・ボーディとの会見が第33章に，タムパ・サンゲとの論談が第53章に詳細に述べられてい

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る．本稿では，特に断境説が述べられている第28章を中心に取り上げ，第53章についても触れたい．なおチュワルにおける悪魔の調伏は，各種のチベット仏教史年表の1112年の項にも記載されている[5]ことから，ミラレーパの生涯において特筆されるべき事績であったことが判る．

3．『グルブム』第28章について

『グルブム』は，ツァンニョン・ヘールカ（gTsang smyon he ru ka, 1452–1507）がそれ以前に存在した多数のミラレーパ伝を蒐集し，1488年に全61章として整理編集したものであると考えられている．ただ，ほとんどの章にはその成立の由来を示す後書きが見られないが，第28章は稀な例外に属する．その後書きによれば，ミラレーパの八大弟子の一人であるゲンゾン（＝ガムゾン）・トゥンパ[6]が，ミラレーパと五人のダーキニーとの歌による問答を「真珠の飾りの数珠と名づけられる詩歌（snyan dngags mu tig rgyan gyi phreng ba）」として纏めたものであるとされており，内容的に極めて信憑性の高いものであるといえる．また本文中に，この問答が行われたのは壬辰の年であるとされていることから，本章は前述の『テプテルグンポ』の記述の元になった資料そのもの，もしくは同系統のものであると考えられる．

さて，第28章の内容は以下のとおりである．壬辰の年（1112年）5月8日の真夜中過ぎ，ロヒタ河の河畔にある隠所で「河の流れのヨーガ（chu bo rgyun gyi rnal 'byor）」を修めていたミラレーパに神霊や悪魔の軍が襲いかかった．空を一変させ大地を揺るがして威嚇してきたが，その中心は血肉を食らう女神ツェリン五姉妹（Tshe ring mched lnga＝ツェリンマ, Tshe ring ma）であった．そこでミラレーパは「(守護）神とダーキニーに軍勢を請う歌（lha dang ḍā ki la dmag sbran pa'i mgur）」を歌った．すると悪魔たちは「妨害を告げる歌（bar chad lung bstan gyi glu）」を歌い，宣戦を布告してきた．これに対してミラレーパは「無畏を覚った歌（mi 'jigs pa khong du chud pa'i mgur）」を披瀝したが，その最後の偈を「おまえたち悪魔どもを憂い畏れることはない．またすべては心の異変である．ああ，三界は輪廻の法である．無にして有とはなんと希有なることか.」[7]で締めくくっている．さらに続いて，散文によって悪魔たちに呼びかけを行っているが，ここに断境説の中核をなす「蘊を食物として布施する」修法が述べられているので，以下にそのテクストと和訳を示すことにしたい．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

4．テクストと和訳

〔資料〕参照上の便宜を考慮して，底本に中国出版本[8]を用いた．異本としてタシルンポ版（以下Tと略）[9]と北京版（以下Pと略）[10]の2種を使用した．

〔テクスト〕

(p.459, l.15)/yang (T: yong, P: yongs) sngon 'khor ba thog med nas tha ma da lta yan chod (P: chad) du grangs brjod kyis mi lang shing (T, P: zhing)/rdul phra rab las 'das pa'i lus ci (T, P: ji) tsam zhig blangs kyang/sdug bsngal 'du byed kyi phung po 'ba' zhig bsags shing don med yal bar dor ba las/don du gyur pa skad cig tsam yang med/da res lus 'byung bzhi 'dus pa'i zag bcas kyi phung po mi gtsang ba'i rdzas sum cu so gnyis las grub pa 'di (p.460, l.1) khyed 'dir tshogs pa'i lha 'dre rnams la dgos na ci'i phyir mi ster te/nang 'gro drug bcud kyi sems can la/mi nga'i pha mar ma gyur pa med pas/de rnams lan chags 'phen (P: len) cing sha 'khon gnyer ba rnams kyi glud (P: blud) du da lta kho bo'i lus 'di gtong bas/ya gi spyi bo'i gtsug nas ma gi rkang ba'i mthil (l.5) yan chad la/lhu bcu gnyis mgo dang bcu gsum dbang po rnam pa lnga don snying rnam pa lgna/nang khrol rnam pa drug/sha dang rus pa/rkang dang tshil bu/klad pa dang klad rgya/zhag dang khong khrag/skra dang sen mo/pags (P: lpags) pa dang dri ma/dbugs dang tshe srog/mdangs dang bkrag la sogs pa so so'i yid la gang 'dod pa rnams/da lta nyid du khyer la tshim (l.10) zhing dgyes (P: dges) pa kho nar gyur cig/gzhan yang sha khrag lus kyi mchod sbyin 'di la brten nas/da phyin chad gnod sbyin srin po'i tshogs rnams zhe sdang gdug rtsub kyi bsam pa ngan pa slar zhi zhing/rgyud zag pa med pa'i snying rje chen pos yongs su gang ba zhig kho nar gyur cig/snying rje des nye bar len pa'i rgyu dang lhan cig byed pa'i rkyen byas nas/da phyin chad skye 'gro sems (l.15) can du gyur pa rnams la gnod cing 'tshe ba las slar log nas shin tu brtse ba'i sems dang ldan te/byams pa dang dga' ba'i bsam pa du mas phan 'dogs shing thams cad kyang bde skyid phun sum tshogs pa'i 'byor ba dang ldan par gyur cig ces rje btsun gyi gsung ngag bden pa'i smon lams de rnams btab pa las/der tshogs pa'i lha 'dre thams cad slar mos shing 'dun par gyur te/ltas (T: lta) ngan cho 'phrul gyi (p.461, l.1) rnam pa de rnams btul (P: brtul) nas zhi ba chen po'i ngang la gnas par te/

〔和訳〕[11]

「(われわれの）過去世での輪廻は，無始よりこのかた今に至るまで数えきれず，（その間）極微を超えるほどの多くの体を受けたが，行蘊の苦しみのみを積み重ね，無益なことを放棄するだけで有益となったことは一瞬もない．四大が和合し三十二の不浄物から成るこの有漏の蘊（体）を，今ここに集まったおまえたち神霊や悪魔が必要とするならどうして与えないことがあろうか．なかでも，六道の一切の有情は人間であるわたしの父母でないことはないから，かれらに負っている借りを返し，恨みに思っているものたちへの代償としてこの体を与えよう．したがって，上は頭頂から下は爪先まで，十二の肢体と頭部との十三，五根，五臓，六腑，肉と骨，骨髄と脂肪，脳と脳膜，脂肪油と血液，髪と爪，皮膚と排泄物，気息と生命，光沢と生気などそれぞれが欲するものを，直ちに取って満足し喜ぶがよい．ほかにもこの血肉の体の布施により，今後，夜叉や羅刹たちが怒り害を加える悪意を鎮め，心を尽きることなき大悲により遍く満たすものとなるよ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

うに．（そして）この大悲が直接の因と（なり），また間接の縁となって，これから後，衆生たちに害をなさず，転じて悲心をそなえ，多くの慈しみと喜びの心によって利益を与え，すべてのものが幸福に満ちた富者となるように．」と尊者（ミラレーパ）の真実なる祈願のお言葉が述べられたので，そこに参集していたすべての神霊や悪魔たちは（ミラレーパを）敬い慕うようになり，不吉な出来事の（もとである）異変を終息させ，大いなる寂静の境地に安住するようになり….

〔解説〕

以上のように，ミラレーパは自分の体のあらゆる部位を神霊や悪魔に与えることによってかれらを調伏し化導したが，この修法はチュー派の開祖として知られるマチク・ラプキドゥンマが，師のタムパ・サンゲから授けられた僅か三句の教誡に基づいて案出したものである[12]．マチクの主著の一つである『殊勝の八章』は断境説を組織的に解説したものであるが[13]，その第4章「蘊を食物として布施する実践（nyams len phung po gzan la bskyur ba）」には，自分の体の肉，血液，骨，五臓，上肢つきの上半身，下肢つきの下半身，およびそれ以外の胡麻粒ほどの部位まですべてを布施することが述べられている[14]．ミラレーパも『グルブム』第5章において，自分を導く六種の道案内（教え）の一つとしてこの「蘊を食物として布施すること（phung po gzan du bskyur ba）」[15]を挙げているが，ミラレーパが直接にマチクからこの教えを伝授されたという記録をミラレーパの自伝およびチベット仏教史書に確認しえない．ただ『蘊施解説』中のマチクの略伝によれば，断境説はマチクが52歳の時（1106年）にはチベットとインド全土に広まっていたとされている[16]ことから，ミラレーパが1112年にこの修法を駆使したことは極めて自然なことであると思われる．

5．『グルブム』第53章について

つぎに『グルブム』第53章には，タムパ・サンゲとの邂逅の模様が詳しく述べられている．タムパが滞在したとされるティンリの南西に聖山ラ(プ)チ・カンが聳え，その周辺にはミラレーパの後半生にゆかりのある寺院や洞窟が点在する．ラ(プ)チ・カンの西側にティンリとネパールとを結ぶ旧街道が走っており，ティンリを南下してトンラ峠を越えニャナンを経由して国境に至る．修行地の一つであるニャナンの「胃の洞窟」[17]にいたミラレーパと，ティンリに滞在していたタムパがトンラ峠で邂逅したことから，本章は「トンラ峠の章（Thong la'i skor）」と呼ばれる．その折り，ミラレーパがタムパから『金剛歌（rDo rje'i mgur）』を授けられたことは注目に値する．本歌は全13偈からなる小編であるがシチェ派の教

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

義を端的に表現した優れた宗教詩であり，コントゥル・ユンテン・ギャンツォ（Kong sprul Yon tan rgya mtsho, 1813–1899）が編集した『教誡蔵』中にも『大成就者タムパ・サンゲが瑜伽自在者ミラレーパに教示した「正法ドゥッゲル・シチェ（苦を鎮める正法）」の真髄をまとめた金剛歌』として収録されている[18]．特に第2偈には断境説における捨身供養の前提となる身心分離の修法が説かれている[19]．なお両者の邂逅の時期について本文中に言及はないが，前述の『テプテルグンポ』ではタムパのティンリ滞在中のことであったとされ，またタムパは1097年にティンリを訪れ1117年に当地で亡くなったとされている[20]．さらにそれに先立つダルマ・ボーディとの会見も同時期であったことが『グルブム』第33章中の記述によって知られることから，両者が出会った時期はミラレーパがチュワルで悪魔を調伏した1112年から1117年までの間と考えられる[21]．

6．結

ミラレーパのチュワルでの女神ツェリン五姉妹をはじめとする神霊と悪魔の調伏は，チュー派の開祖マチク・ラプキドゥンマによって独創された断境説によるものであり，それは彼のその後の布教活動に一大転機をもたらすこととなった[22]．さらに彼がマチクの師であるシチェ派の開祖タムパ・サンゲからも『金剛歌』を伝授されていたことを明らかにした．これが源流となりカギュ派において断境説の継承がなされ，特にカルマ・カギュ派ではその傾向が顕著となってランジュン・ドルジェやカルマ・チャクメーなどの学匠を輩出するに至った[23]ものと考えられる．

1）原語はbDud kyi gcod yul; gCod yul; bDud kyi spyod yul; sPyod yul．拙著『西蔵仏教宗義研究・第二巻―トゥカン『一切宗義』シチェ派の章―』東洋文庫，1978年，pp.35, 53; 'Gos lo tsha ba gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po*（以下DTNと略），1478, Śata-piṭaka series, vol. 212, New Delhi, 1974, vol. Pa, fol.1b（p.870），l.1; G. N. Roerich, *The Blue Annals*（以下BAと略），Calcutta, 1949, p.980参照．

2）DTN, vol. Nya, fol.12a（p.373），l.1–fol.16a（p.381），l.4; BA, pp.427–436参照．なお，『ラムトゥン』（注8参照）によれば，生没年は1052年（壬辰）–1135年（乙卯）である．MNG, p.19, l.3; p.841, l.6参照．

3）チュワル（Chu bar）は，聖山ラ（プ）チ・カン（La phyi gangs）の南に位置し，ミラレーパの臨終の地として知られる．Turrell V. Wylie, *The Geography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad*（以下GTDと略，『瞻部州広説』），Rome, 1962, pp.65, 130; Victor Chan, *Tibet Handbook: A Pilgrimage Guide*, Chico, 1994, pp.256, 260; 伊藤健司「ミラレパ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の足跡をたどる」『とんぱ』第2号，出帆新社，1999年，pp.14–21；長田幸康『旅行人ノート・チベット』第4版，2006年，pp.118–119等参照.

4）DTN, vol. Nya, fol.15b (p.380), ll.2–4；BA, pp.434–435参照.

5）Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor の年表（1748年作）には「チュワルでミラに悪魔の軍が現れた（Chu bar Mid lar 'dre dmag byung）」（*The Collected Works of Sum-pa-mkhan-po*, vol. 1, Śata-piṭaka series, vol. 40, New Delhi, 1975, fol.247a＝p.549）とあり，Tshe tan zhabs drun の年表（1982年作）は上記の "Mid lar" を "Mi lar" とする（『蔵族歴史年鑑』青海民族出版社，西寧，1982, p.169）ほかは同文である．また Dung dkar blo bzang 'phrin las の年表（2002年作）には「尊者ミラレーパはラ(プ)チ・カンラで修行を完成され，女神ツェリン五姉妹を調伏した（rje btsun Mi la ras pas La phyi gangs rar sgom sgrub mdzad cing/ Tshe ring mched lnga dam la btags）」（東噶・洛桑赤列編纂『東噶蔵学大辞典』中国蔵学出版社，北京，2002, p.2275）とある．原田覺「チベット仏教史年表（西暦1087～1146年）」『国士舘大学文学部人文学会紀要』第37号，2005年，p.22参照.

6）Ngan rdzong ston pa の異称に，Ngan rdzong Byang chub rgyal po, Ngan rdzong bo dhi rā dza, Ngan rdzong ras pa があり，Ngan rdzong は Ngam rdzom とも表記される．Andrew H. Quintman, *Mi la ras pa's Many Lives: Anatomy of a Tibetan Biographical Corpus*, UMI Number: 3224727, Michigan, 2006, p.51, n.16参照.

7）原文は "'dre khyod la nyam nga 'jigs pa med// lar thams cad sems kyi cho 'phrul// e ma khams gsum 'khor ba'i chos// med bzhin snang ba ngo mtshar che//"（注8, MNG, p.459, ll.11–13）である.

8）*rNal 'byor gyi dbang phyug chen po mi la ras pa'i rnam mgur*（以下MNGと略），（『米拉日巴伝及道歌（蔵文）』），青海民族出版社，西寧，1981．本書はミラレーパの伝記『ラムトゥン』（『東北目録』No.7046）と歌集『グルブム』（同No.7047）とを合本したものである．すなわち，『グルブム』は『ラムトゥン』の第2部・第8章「修行の完成と有情の救済の章」の広説であることから，『ラムトゥン』の第1部3章と第2部の第1章から第8章（pp.7–195）のあとに，『グルブム』（全61章，pp.196–812）を挿入し，最後に『ラムトゥン』の第2部・第9章（pp.813–869, pp.869–874は跋文）をもって終わる．なお，2004年に第2版（全848頁）が出版されているが，普及度を考慮して旧版に拠った.

9）*rJe btsun mi la ras pa'i rnam thar rgyas par phye ba mgur 'bum*, TBRC No. W1KG3714, fol.124a (p.703), l.3–fol.124b (p.704), l.5.

10）Ditto, TBRC No. W1KG1252, fol.143a, l.1–fol.143b, l.4.

11）Garma C. C. Chang, *The Thousand Songs of Milarepa*, vol. 1, New York, 1962, p.304；おおえまさのり(a)『ミラレパの十万歌』いちえんそう，1983年，p.431参照.

12）拙著，pp.51–60；拙論「シチェ派」『岩波講座東洋思想第11巻・チベット仏教』1989年，pp.215–217参照.

13）拙稿(a)「マチク・ラプキドゥンマの著作について」『印度学仏教学研究』第60巻1号，2011年，pp.484–491参照.

14）*Khyad par gyi le lag brgyad pa*, 'Jam mgon Kong sprul Blo gros mtha' yas, *gDams ngag*

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

mdzod（以下 DDD と略），ed. dPal spungs, vol. 9, Delhi, 1971, p.607, l.2–p.609, l.3；東洋文庫蔵外文献（以下 TB と略）No.50-764 (3), fol.48b, l.3–fol.50a, l.4 参照.

15）原文では「この蘊を食物として布施することは，我執を抑制する道案内である（phung po gzan du bskyur ba 'di// bdag 'dzin 'dul ba'i lam mkhan yin//）」とする．MNG, p.243, ll.5–6 参照.

16）*Phung po gzan bskyur gyi rnam bshad gcod kyi don gsal byed, gCod kyi chos skor*, Tibet House, New Delhi, 1974, fol.34b (p.77), l.1–fol.35b (p.79), l.1；三浦順子『智慧の女たち—チベット女性覚者の評伝—』春秋社，1992 年，pp.284–285；拙稿（b）「断境説の綱要書『蘊施解説』について」『印度学仏教学研究』第 59 巻 1 号，2010 年，pp.438–445 参照.

17）原語は gNya' nang Grod phug.『ラムトゥン』の第 2 部・第 8 章で，ミラレーパ自身が挙げている主要な修行地 28 ヶ所の一つであり，また『贍部州広説』にはミラレーパの瞑想窟(sgrub phug)として紹介されている．MNG, p.188, l.16–p.189, l.8；GTD, p.65；W. Y. Evans-Wents, *Tibet's Great Yogi Milarepa*（以下 TYM と略），London：Oxford University Press, 1951（2nd edition），pp.236–237；Andrew Quintman, Tsangnyön Heruka, *The Life of Milarepa*（以下 TLM と略），Penguin Books, 2010, p.170；おおえまさのり（b）『チベットの偉大なヨギー・ミラレパ』めるくまーる社，1992 年，pp.285–286 参照.

18）*Grub chen dam pa sangs rgyas kyis rnal 'byor gyi dbang phyug mi la ras pa la gdams pa'i dam chos sdug bsngal zhi byed kyi snying por dril ba'i rdo rje'i mgur*, DDD, fol.18b (p.36), l.6–fol.19b (p.38), l.1；MNG, p.751, ll.4–19 参照．なお拙稿「タムパ・サンゲの『金剛歌』—ミラレーパに与えた教誡—」（『奥田聖應先生頌寿記念　インド学仏教学論集』佼成出版社，未刊）では，『教誡蔵』中に収載されている『金剛歌』にチュー派のラトゥー・ミキュードルジェ（La stod Mi bskyod rdo rje, 12 世紀）によるともされる注記が付されていることから資料的に信憑性のあるものと考えて，これが『グルブム』に引用されたと推定した．しかし，コントゥル・ユンテン・ギャンツォが『グルブム』中の『金剛歌』にラトゥーによるともされる注記を付し，『大成就者タムパ・サンゲが瑜伽自在者ミラレーパに教示した「正法ドゥッゲル・シチェ」の精髄をまとめた金剛歌』という表題をつけて，『教誡蔵』中に収載した可能性も考えられる.

19）第 2 偈は「身体に病いや痛みが生じた時は，「界」と「知」とを一つに融合させるのである（lus na na tsha byung tsa na// dbying rigs gcig tu bsre ba yin//）」である．ここに「界」とはわれわれを取り巻く「法性の空界」であり，「知」とは「心（sems）」あるいは「滴（thig le）」とも表現される一種の精神生理的原理である．拙著，pp.14, 53–54 参照.

20）DTN, vol. Na, fol.22b (p.812), ll.6–7；BA, pp.914–915 参照.

21）『グルブム』第 33 章の冒頭（MNG, p.524, ll.11–15）に，当時自分を含め 5 人の大成就者がいたことを述べ，その一人として「ティンリのタムパ・サンゲ（Ding ri na Dam pa Sangs rgyas）」を挙げていることから，ダルマ・ボーディとの会見はタムパがティンリに来た 1097 年以降であることが知られる．また『ラムトゥン』の第 2 部・第 8 章には，その広説とされる『グルブム』の内容が 3 部に分けて略述されているが，その第 2 部「弟子の育成の部」（MNG, p.193, ll.4–8）において，ミラレーパはチュワル

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

でツェリンマに関する三種の法を順次に説かれたのち，レーパ・ワンチュクドルジェ（Ras pa dBang phyug rdo rje）とダルマ・ボーディに相次いで会われたとされる．したがって，前述のミラレーパのチュワル訪問以降の事績に関する『テプテルグンポ』の記述は，①チュワルにおける悪魔の調伏，②ダルマ・ボーディとの会見，③タムパ・サンゲとの論談と年代を追ったものであることが確認される．

22）『ラムトゥン』の第2部・第8章において，レーチュンパがミラレーパにあなたの最初の弟子は人か，あるいは人にあらざる悪鬼であったかを訊ねたのに対して，「最初はわたしに害を加えようとした悪鬼たちが現れ，その後に一般の弟子が集まった．そしてツェリンマによる異変がおこり，つづいて他の直弟子たちが現れたのである．そしてわたしの教法は悪鬼のツェリンマと，人のウーパ・トゥンパ（dBus pa ston pa = sGam po pa, TLM, p.245, n.20 参照）が広めるであろう．」と述べられていることから，女神ツェリンマの役割の重要性が窺われる．MNG, p.187, ll.11–16; TYM, p.235; TLM, p.169; おおえまさのり（b), p.284 参照．

23）ミラレーパの高弟であるタクポラジェ（Dwags po lha rje/ sGam po pa, 1079–1153）に始まるタクポ・カギュ派の四大分派の一つであるカルマ・カギュ派はトゥースムケンパ（Dus gsum mkhyen pa, 1110–1193）により創始された．その三世ランジュン・ドルジェ（Rang byung rdo rje, 1284–1339）には，マチク・ラプキドゥンマの主著である『本説（*bKa' tshom chen mo*）』に対する有名な注釈書『本説科文注釈（*gCod bka' tshoms chen mo'i sa bcad*）』（DDD, pp.502–527; 拙稿（a), pp.489–490 参照）のほか，*Zab mo bdud kyi gcod yul gyi khrid yig*（DDD, pp.618–629）がある．さらにこの系統に属するカルマ・チャクメー（Karma chags med/ Karma a rā ga/ Rā ga a sya/ Rā ga a sye/ Rā ga'i ming can/ A rā ga/ Ā rā ga/ Ā: rā ga, 1613–1678）に，カム地方で実践されていた断境説の修行に関する著作として *gCod tshogs gcod khrid sogs*（TBRC, No.W23820, 200 pages）があり，また同著者による断境説関係の16文献が河口慧海師により東洋文庫に将来されている（TB, No.49-738–740, 742–751, 753–755; 財団法人東洋文庫ホームページ「河口慧海将来チベット語蔵外文献」参照）．一方，タクポ・カギュ派とともにカギュ派の二大潮流を成すのがキュンポ・ネルジョル（Kyung po rnal 'byor, 1086–1139）により創始されたシャンパ・カギュ派である．ミラレーパとの直接の関連は認められないが，この派に属するタントン・ゲルポ（Thang stong rgyal po, 1361–1485, 生没年に諸説あり）にも，*Ma gcig gsang gcod kyi snyan brgyud*（TBRC, No.W23919, 570 pages）があることを付記しておきたい．立川武蔵『西蔵仏教宗義研究・第五巻—トゥカン『一切宗義』カギュ派の章—』東洋文庫，1987年，pp.4–8, 47–57, 151–154 参照．

〈キーワード〉　断境説，gCod yul，phung po gzan du bskyur ba，ミラレーパ，タムパ・サンゲ，マチク・ラプキドゥンマ，『グルブム』，『ラムトゥン』，『金剛歌』

（四天王寺大学教授）

NII-Electronic Library Service